

令和7年度 全国学力・学習状況調査の分析について

和田山中学校

<国語>

1 結果分析

まずP曲線(赤線実線)に着目すると、全国平均(赤線点線)とほぼ同様の線であるが、問題別に見た場合、問題番号「4二」(問題概要：手紙の下書きを見直し、修正した方がよい部分を見つけて修正し、修正した方がよいと考えた理由を書く)の正答率が低くなっていた。ここから、相手の立場に立って、文章を整える力に課題があることが分かる。

次にS曲線に着目すると、「B書くこと」の分野では、問題番号「1二」(問題概要：ちらしに「会場図」を加えた目的を説明したものとして適切なものを選択する)、「1三」(ちらしの中の情報について、示す位置を変えた意図を説明したものとして適切なものを選択する)に課題が見られた。この点から、目的に応じて集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にする力や内容のまとまりを意識して文章の構成や展開を考える力の育成に課題があったことが推察される。

また「A話すこと・聞くこと」の分野では、問題番号「2二」(問題概要：聞き手の反応を見て発した言葉について、そのような発言をした理由を説明したものとして適切なものを選択する)、「2三」(問題概要：「話の順序を入れ替えた方がよい」という助言の意図を説明したものとして適切なものを選択する)に課題があった。この点から、相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫する力や、自分の考えが明確になるように、論理の展開に注意して、話の構成を工夫する力が強くないことが窺い知れる。

2 国語科課題解決に向けて

今回の分析結果から課題の解決に向けてまとめたい。まず、授業の中で自身の考えを表出する際に、読み手や聞き手の立場に立って自分自身の考えがよりよく伝わるための力を育成する学習活動に今後も取り組みたい。また、授業の中で様々な情報(文章・図表)の中から、情報と情報との関係を見だし、結び付けて理解、整理する学習活動も取り組む必要がある。

本校で取り組んでいる「授業づくりのUD化」を継続させ、個別の生徒理解を土台にし、多くの生徒が授業に参加でき、分かる実感が持ちやすくなる授業を実践していきたい。

<数学>

1 結果分析

本校の各設問の正答率と全国平均を比較したときに、同程度または上回っている設問は15問のうち5問あった。反対に、P 曲線から読み取れる「重点的に指導すべきと考えられる問題」も5問あった。その中でも全国平均との差が顕著なものは、B 領域に該当する「平行四辺形になるための条件」と、D 領域に該当する「相対度数」の問題である。また、P 曲線については全国平均が滑らかなカーブを描いているのに対して、本校は滑らかなカーブにはならず、凹凸している。

A、B、D 領域の設問を含めて、説明する問題は正答率が全国平均を下回っている。説明問題に苦手意識を持っている生徒がいる反面、「比較的正答が容易だったと考えられ、不注意による誤答や比較的克服が容易なものと想定される設問」につまずいている生徒も多く在籍していることが分かった。本校の数学科の課題は、基礎の定着を図るとともに、B、D 領域に関わる学習に重点を置くことである。

2 数学科課題解決に向けて

授業展開においては、学校全体で取り組んでいる「学習内容や本時の目標の明示」「授業の流れの確認」「考える時間の確保」など、授業づくりのユニバーサルデザイン化に取り組み、生徒全員が参加できる授業作りを行っていく。また、より数学に興味を持てるように生徒の気づきを促し、「主体的・対話的で深い学び」を実現していきたい。

基礎の定着に関しては、生徒同士の教え合い活動を活用し、説明する側、説明を受ける側、両者にとって意味のある時間を作ることで定着につながると考える。

また、授業の終わりに振り返りの時間を取り、「何を学んだのか・できるようになったのか」「既習事項が何につながったのか」「何が理解できなかったのか」などメタ認知の視点から数学的な欲求を生まれるような取り組みを行う。B、D 領域に関する学習はともに視覚的な学習支援が効果的である。ICT 機器を有効に活用した授業作りを行う。

<理科>

1 結果分析

S－P表分析に使われた10問のうち8問で、本校のラインは全国平均のラインよりおよそ4～8%ほど下回っていたが、残り2問はほぼ全国平均と等しいか2.4%上回っていた。ただしその2問は領域も異なっていたり、その2問と同じ領域の問題でも全国平均より下回り方が大きいものもあったりと、領域による傾向は見られなかった。解答方法（選択式、短答式、記述式）による傾向もはっきりしなかった。また「当該生徒にとって正答が比較的容易だったと考えられる問題」の誤答数はほとんどの生徒が1～2問だったが、3問あった生徒も何人かいた。またその誤答の分布は、全国平均の正答率が50%を切ると上位の生徒でも増える傾向があった。

全体的な解答の傾向としては、無記入の割合が全国平均より低いことがあげられる。記述式であっても全国平均より10%以上少ないものもあった。

以上のことから、得意な領域が偏っているわけではなくどの領域にも積極的に取り組もうとし、日常的に知っていることや基本的な内容は理解しているが、その理解はあいまいで応用問題に対応するまで深められていない、と考えられる。

2 理科課題解決に向けて

1の結果分析から、この課題解決に向けては、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践（授業づくりのユニバーサルデザイン化）に取り組み、子どもたち一人ひとりを学びの主体者として深い内容理解に導いていく必要がある。

特に覚えた知識を他の人に教えたり共有したりして深化し、その知識を使う場面を考えさせ応用力を養っていく必要がある。

<生活面について>

I 結果分析

【課題】

- ・友達関係に満足しているかについて、概ね良好ではあるが、当てはまらないの割合が、全国や兵庫県に比べると高い。また、自分と違う意見について考えるのは楽しいと考えている割合が低い。
- このことから、道徳的な考えは持ちつつも、学校生活に見られる交友関係の狭さや、日々の自己中心的な言動につながっていると思われる。
- ・学校の授業時間以外に、1日当たりの学習時間は、2時間未満の割合が高く、中でも1時間未満が全国や兵庫県と比べても高い。また、学習をする際に、PCやタブレットなどのICT機器を使用する時間においても、1時間未満の使用率が圧倒的に高い。
- ・土日の学習時間についても、2時間未満が80%近くおり、1時間未満では、50%近くになる。
- このことから、家庭での学習習慣が定着しておらず、圧倒的に学習量が不足していることがはっきりとしている。また、ICT機器の所有率が高い割に、学習での使用率が低いことから、ゲーム等で使用しているものと考えられる。
- ・将来の夢や目標を持っている割合が低い。
- このことから、目的をもって進路選択をしていないため、途中で進学先で頑張りきれない場合が見られる。
- ・ICT機器を使用して、情報を整理することや、プレゼンテーションが作成できるかの割合が低い。
- このことから、得た情報を活用し、理解深めるところまでできていないと考えられる。
- ・普段の生活の中で、幸せな気持ちになる割合が高く、自分によいところがあると思う割合も高い。しかし学級生活をよりよくするために、話し合いをしたり、互いの意見のよさを生かして解決していく割合は低い。また困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できるかの質問に3割の生徒ができないと答えている。
- このことから、自分の価値観で過ごすことは良好であるが、集団の一員として、また友達との間に何らかのトラブルが生じたときに、その解決策がわからず、問題から逃げてしまう傾向が見られる。

【定着】

- ・毎日同じ時間に起床し、就寝する割合が高い。また朝食をとっている割合も高い。
- このことから、安定した家庭生活を送っている生徒が多く、学校に行くのが楽しいと答える割合も高い。しかしながら、実際は同じ生徒が遅刻をし、簡単に欠席する傾向も見られる。家庭環境の二極化が見られ、不安定な家庭環境の中で生活している実態も見える。

・ いじめは、どんな理由があってもいけないことや、人が困っているときは、進んで助けるかの割合が高い。また、授業や学校生活において、お互いに協力しながら課題解決に取り組む割合も高い。

→このことから、班活動や委員会活動で協力し合う場面が多いことや、調べ学習などを通して、課題を解決していく時間の積み重ねが現状につながっていると考えられる。

・ PC やタブレットなどの ICT 機器を利用して、文章を書くことができる割合が全国や兵庫県と比べて高い。

→このことから、通常の授業だけではなく、休み中においても課題提出の機会を設けている成果が表れていると考えられる。

2 今後に向けて

本校の特徴として、意識高く学習に取り組む生徒もいるが、反面、調査結果にもあるように、家庭学習の定着が難しく、学習量の不足から学力が上がらない傾向にある。生徒指導面からも、授業についていけないことが、心の不安定さにつながり、さらには学校の荒れにならないようにしていかなければならない。

また、保護者も生徒も限られた人間関係の中で生活する家庭が多くなりつつある今、学校生活上において、生徒の自己中心的な言動が多くなり、保護者対応も難しくなっている。価値観の違いと言えはそうだが、自分の考えに固執するのではなく、他者との関わりを通して、他者の意見を受けとめ、考え、結論を導きだすことが大切だと考える。

そこで、本校では以下の3点について、取り組むこととする。

①ICTの有効的活用

興味・関心を高めるための ICT 機器の活用、理解を深めるための ICT 機器の活用など、学習につながる有効活用を考える必要がある。各教科のみならず、情報機器に触れる時間を多く作り、家庭学習につながるよう、ロイロノートの活用を含め、工夫する。

②授業改善

数学に関して、文字式を用いた説明や図形の証明を読んで、書かれていることを理解しているかの割合は全国や兵庫県と比べてかなり低い。読解力のなさをはじめ、資料を通して答えをどのように導いていくかは、数学に限らず、どの教科でも重要である。生徒同士の協働的な学びの中から、見方や考え方を学び、アウトプットできるよう主体的に学べるような授業展開を図る。

③特別活動・道徳・総合

他者との話し合いを通して、自分の考えや意見を表現するだけではなく、自分にはない新たな発見から更に、自分の考えを深める機会を多くつくる。学校教育全般で、その機会を体験することにより、学校や学級の自治的空間を作り出すことにもつながるものとする。